

中国の水、日本の水（巻頭エッセイ）

著者	尾田 栄章
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	122
ページ	1-1
発行年	2005-11
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005590

中国の水、日本の水

尾田栄章

中国は、まったく違った二つの国から成り立っている。少なくとも水、川から見るとそうなる。砂漠を流れる乾いた黄河流域とアジアモンスーン地帯を悠然と流れる湿潤な長江流域。

「不飲盗泉」という言葉がある。淮南子という書物の中で、曾子は盗泉という名の泉の水は飲まなかった、それほどに清廉だったというのである。しかし、どうもしつくりこない。そもそも盗泉などという名前を大事な泉につけるだろうか。砂漠の民ツアレグの箴言は云う。「この世に決して盗んでならないものがある。例えそれが夢の中であつても、人の命を救うためであつても。それは水だ。泉の水だ」。砂漠の民にとっては「不飲盗泉」は絶対の掟。しかし湿潤の長江流域ではそれが理解できない。不可解な解釈を捻り出すしかなかったのだ。

一方、日本には一級河川だけで一〇九水系、二級河川は二七二水系にも及ぶ。それぞれが独立水系であるが、同数の異なった文化圏があるわけではない。同じ言語を使い、似通った文化を共有している。すべてがアジアモンスーン地域にある日本の川が、長年を掛けて育んできた結果である。

さて本論である。中国と日本、全く異なる水文化を持つ二国間での国際協力が成り立つのか。

流域の大きさは別にして、長江は我々にはまだ分かる。洪水が毎年のように頻発し、治水が何よりも優先される。三峡ダム

も、莫大な発電量を誇るものの、何といつても治水が最大の目的との説明を受けるとそのままに納得できる。

一方、黄河は難しい。一九七二年に始まった「黄河断流」は最も厳しかった時には河口から上流七〇〇キロまでが干上がったが二〇〇〇年以降は治まっている。黄河からの取水料金が一気に倍増されたからだという。倍増すれば取水量は減るだろうが、使いたい水も使えないのでは問題解決には程遠い。

こんな様相を異にする日中間の河川でも、政府レベルでの技術交流には長年の実績がある。しかし民間、NGOレベルでの交流は、個別契約案件は別にして始まったばかり。すでに上海などの大都市の水事業全般を一括受注しているフランス企業などとは大違いである。欧米の国々は海外には少なくとも産・官が一体となって出ていく。「トランジスターの商人」の幻影に

いまだに怯えている日本との格差は限りなく大きい。となると、日本の水分野の産・官・学・NGOの結集を目指し、第三回世界水フォーラム開催の実績に基づいて設立された日本水フォーラム(JWF)が果たすべき役割は大きい。産・官の境がない中国との間では尚さらである。心して進まなければならぬ。

(おだ ひであき／日本水フォーラム事務局長)